東書教育シリーズ　中学校道徳科教授用資料

道徳 Q&A

実践編

東京書籍

目 次

巻頭言

「特別の教科　道徳」の全面実施に当たって ── 飛田 仁 …… 1

Q&A

Q1 「道徳教育全体計画　別葉」はどのように作成し，どのように活用すればよいですか？ … 2

Q2 道徳科の年間指導計画の指導の概要とはどのようなものですか？ …… 4

Q3 道徳科の重点的指導や複数時間の関連を図った指導とはどのようなことですか？ …… 5

Q4 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなことでしょうか？ …… 6

Q5 道徳科の目標にある「道徳的諸価値の理解を基に」とはどのようなことですか？ …… 7

Q6 道徳科の目標にある「物事を広い視野から多面的・多角的に考え」させるために，
どのような工夫をすればよいのでしょうか？ …… 8

Q7 道徳科の授業は「ねらい」を明確にもって指導することが大切と言われますが，
「ねらい」は，なぜ大切なのですか？ …… 9

Q8 道徳科における質の高い指導方法として，「自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」
「体験的な学習」が示されています。それぞれどのような学習方法ですか？ …… 10

Q9 グループワークや役割演技など，多様な指導方法はどのように行えばよいですか？ … 11

Q10 道徳の授業では，「導入の段階が大切」ということをよく聞きますが，導入の役割に
ついて説明してください。また，効果的な導入とはどのようなものですか？ …… 12

Q11 展開の段階は，中心的な教材によって道徳的価値の自覚を深める段階と言われて
いますが，どのような発問構成を考えればよいのでしょうか？ …… 14

Q12 授業の終着点が行為行動の是非や善悪になってしまいがちです。
展開の後段や終末の効果的な方法を教えてください。 …… 16

Q13 「考え，議論する道徳」を実現するために，多くの生徒の発言を引き出したいのですが，
発言する生徒が限られてしまいます。どのような工夫をすればよいのでしょうか？ …… 18

Q14 「特別の教科　道徳」が始まり，一人一人の生徒に対する評価が必要になっています。
道徳科の評価に対する基本的な考え方は何ですか？ …… 19

Q15 道徳科の評価は，大くくりな評価とあります。
１時間１時間の授業の評価は考えなくてよいのでしょうか？ …… 23

「特別の教科　道徳」の全面実施に当たって

飛田（ひだ）　仁（ひとし）

『中学校学習指導要領』一部改訂（平成 27 年 3 月）による，中学校の道徳教育及び，「特別の教科　道徳」（以下「道徳科」）が全面実施となりました。各学校においては，道徳教育の目標及び道徳科の目標にもとづいて，指導計画（道徳教育の全体計画，道徳科の年間指導計画）を作成し，教科書を使用した道徳科の授業が進められ，道徳科の評価も行われていると思います。そこで，全面実施に当たり，次の二つのことについて，改めて考えてください。

一つは，道徳教育の目標及び道徳科の目標は明確で分かりやすい記述に改善されましたが，道徳教育の目標が「道徳性を養う」ことは変わっていません。また，道徳科の目標は，道徳的実践力という文言は使われなくなりましたが，「道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」ことは引き継がれています。これは昭和 33 年の道徳の時間の設置から変更されず，道徳教育にとって不易なものとなっています。この目標について十分理解を深めたうえで，道徳教育及び道徳科の授業を進めることが大切です。

もう一つは，道徳科の評価について，生徒の学習状況や道徳性に係わる成長の様子を評価する視点への関心が高まっていますが，指導と評価の一体化を考えると，発問の内容や発問の仕方，発問に対する生徒の発言などの受け止め方，生徒が多面的・多角的に考えるための教材・教具の活用方法など，評価の観点をもとに，道徳科の学習指導過程や指導方法について，教師が自らの指導を振り返り，指導の改善に努めることが重要です。

『道徳Ｑ＆Ａ実践編』は，第１集に載せられなかった内容や，第１集の発行後に寄せられたご意見をもとに，学校で活用しやすいように，できるだけ多くの実践例を紹介する実践編としました。

『道徳Ｑ＆Ａ実践編』が，道徳教育研修会等の資料として，教師間の多面的・多角的な考え方の交流などのお役に立てれば幸いです。

Q1 「道徳教育全体計画　別葉」はどのように作成し，どのように活用すればよいですか？

A 各教科等の目標や内容と道徳教育との関連を「別葉」で明らかにして，道徳内容を意識しながら，各教科等の授業を計画的に進めることが大切です。

道徳教育の全体計画

学校における道徳教育については，『中学校学習指導要領』(平成 29 年 3 月) 第 1 章総則第 1 の 2 (2) に，次のように示されています。

> 学校における道徳教育は，特別の教科である道徳 (以下「道徳科」という。) を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり，道徳科はもとより，各教科，総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて，生徒の発達の段階を考慮して，適切な指導を行うこと。

この基本方針は，道徳教育の目標である道徳性を，学校の教育活動全体を通じて育成するという基本姿勢を示したもので，道徳教育の全体計画は，道徳教育の目標を達成するための方策を総合的に示した教育計画です。道徳科のカリキュラム・マネジメントを具体化する基盤でもあります。

各教科等における道徳教育

各教科，総合的な学習の時間及び特別活動（以下「各教科等」）のそれぞれの特質とは，主に『中学校学習指導要領』に示された各教科等の目標や内容です。各教科等の目標や内容には道徳性や 22 の内容項目に関わる事柄が含まれているので，内容項目との関連を明確にし，それらに含まれる道徳的価値を意識しながら，各教科等の授業を行うことが学校の教育活動全体通じて行う道徳教育を進めることになります。

例 社会科の目標［第 2 章第 2 節社会第 1（3）］

「… a 我が国の国土や歴史に対する愛情， b 国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ることや， c 他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。」　（アルファベット，下線は筆者による。）

関連する道徳内容項目

a … C (17)［我が国の伝統と文化の尊重，国を愛する態度］

b … C (12)［社会参画，公共の精神］

c … C (18)［国際理解，国際貢献］

道徳教育全体計画の別葉の作成

各教科等のそれぞれの特質に応じた道徳教育については，『中学校学習指導要領』第 1 章総則第 6 の 1 に，次のように示されています。

> …道徳教育の全体計画の作成に当たっては，…（中略）…，道徳科の指導方針，第 3 章特別の教科道徳の第 2 に示す内容との関連を踏まえた各教科，総合的な学習の時間及び特別活動における指導の内容及び時期並びに家庭や地域社会との連携の方法を示すこと。　（下線は筆者による。）

平成 20 年版の改訂から，各教科等の道徳教育について，「指導の内容及び時期を示す」必要があると記載されています。このことについて，『中学校学習指導要領解説　総則編』(平成 29 年 7 月　以下「解説総則編」) 第 3 章第 6 節 1（2）の中に，「なお，全体計画を一覧表にして示す場合は，…例えば，各教科等における道徳教育に関わる指導の内容及び時期を整理したもの…を別葉にして加えるなどして，年間を通して具体的に活用しやすいものとすることが考えられる。」と説明されています。

全体計画の別葉を作成するには，全体計画の作成と同様に，校長の明確な方針の下に，道徳教育推進教師を中心として，全教師の共通理解のもとに協力し合って作成することが大切です。

道徳科の年間指導計画等の改善

別葉をもとに，道徳科の年間指導計画（指導の概要）の他の教育活動等における道徳教育との関連の欄に，各教科等における道徳教育の内容を記述したり，各教科等の年間指導計画や学校行事計画の備考欄に，関連する道徳内容を載せたりするなど，教師が活用しやすい方法を考えるとともに，ＰＤＣＡサイクルに沿って，年度ごとに改善を進めることが必要です。

別葉にはさまざまな形が考えられ作成されていますが，一つの例を次に掲載します。

例　「道徳教育全体計画　各教科等編　1 年」

月		4 月	5 月	6 月	7 月	8・9 月
国語	学習内容	話し方はどうかな 詩の心　ほか	飛べ　かもめ さんちき　ほか	オオカミを見る目 碑　ほか		スズメは本当に減ってい 月夜の浜辺　ほか
	道徳内容	B［礼儀］ B［相互理解］ D［感動］	D［生命の尊さ］ A［向上心］ C［勤労］	A［真理の探求］ D［自然愛護］ C［世界の平和］		D［自然愛護］ D［感動］
社会	学習内容	世界の姿 ・世界の国々と地域区分 ほか 世界各地の人々の生活と環境		歴史の流れ	古代までの日本 ・古代文明 ・日本列島誕生と大陸の交流 ・古代国家の歩みと東アジア	世界の諸地域 アジア・ヨー ・オセアニアの
	道徳内容	D［自然環境の保護］ C［国際理解］ B［相互理解］		C［国を愛する態度］ C［日本の伝統と文化の尊重］ C［国際理解］		D［生命の尊さ C［差別偏見の
特別活動	学習内容	集団生活を考える 学級目標と組織作り	体育祭・自然教室・生徒総会に向けて	自然教室のまとめ 期末テストの心構え	学校祭に向けて 夏休みに向けて	夏休みのまとめと 2 学期の抱負
	道徳内容	C［集団生活の向上］ C［よりよい学校生活］	B［友情］ C［集団生活の向上］	B［友情］ C［集団生活の向上］	B［男女の信頼］ A［自己の向上］	A［節度と調和］ A［向上心］

2 Q 道徳科の年間指導計画の指導の概要とはどのようなものですか？

A 学習指導案のよりどころとなる「1時間ごとの指導の概要」を整備することが，道徳科の授業を充実させることになります。

道徳科の年間指導計画と学習指導案

各学校では，道徳科の授業が始まり，その指導方法とともに，年間指導計画や学習指導案の整備が重要になっています。

年間指導計画と学習指導案については，『中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』（平成 29 年 7 月　以下「解説道徳編」）第 4 章第 1 節の 2 に，次のように示されています。

◆ 年間指導計画の意義

「個々の学級において，道徳科の学習指導案を立案するよりどころとなる」

◆ 年間指導計画の内容

「指導の時期，主題名，ねらい及び教材を一覧にした配列表だけでは年間指導計画としては機能しにくい。そのような一覧表を示す場合においても，学習指導過程等を含むものなど，各時間の指導の概要が分かるようなものを加えることが求められる。」

（下線は筆者による。）

「1 時間ごとの指導の概要」

年間指導計画は，学習指導案のよりどころであり，学習指導過程等の指導の概要が必要です。

指導の時期，主題名，ねらい及び教材を一覧表にした月別主題配列表を，道徳科の年間指導計画としている場合が多いですが，それだけでは学習指導案を立案することは難しいです。

全教師の協力のもとに，「1 時間ごとの指導の概要」を整備して，道徳科の授業を充実することが大切になります。

例　道徳科の年間指導計画　1時間ごとの指導の概要

2年　10月第4週

主題名		弱さを克服する強さ
内容項目		D（22）［よりよく生きる喜び］
教材名		銀色のシャープペンシル（木下一「道徳教育推進指導資料３」文科省）
主題構成の理由（省略）		○ねらいや指導内容についての教師のとらえ方 ○主題に関連する生徒の実態と教師の生徒観 ○使用する教材の特質や取り上げた意図や活用方法
ねらい		人間には弱さ，醜さがあることを理解し，弱さを乗り越えて人間としてよりよく生きていこうとする態度を養う。
学習指導過程	導入	1「自分の弱さ」を感じたことについて話し合う。
	展開	2 教材を読んで，次のことについて話し合う。 ○「卓也のもの」と分かってからも，すぐに返そうとしなかったのはなぜか。 ○「返したのだから文句はない」と思った時の主人公の気持ちはどうだったろうか。 ◎すべての星が自分に向かって光を発しているように感じたのはなぜか。 3 今の自分を振り返り，次のことについて話し合う。 教材を通して学んだ「弱さを克服する強さ」について，今の自分の見方・考え方や感じ方，行動の仕方はどうだろうか。
	終末	4『私たちの道徳』P 121・122「人間の強さや気高さを信じ生きる」を読む。
関連事項	他の教育活動	保健体育・音楽　D［生きる喜び］
	関連資料	花に寄せて　D［よりよく生きる］

Q3 道徳科の重点的指導や複数時間の関連を図った指導とはどのようなことですか？

A 道徳教育重点目標や学年の重点目標の達成を目指して，目標に関わる内容項目の指導時間を増やし，重点的な指導や複数時間の関連を図った指導を行うことです。

重点的な指導

「学校の道徳教育重点目標や学年の重点目標など，重点的に指導しようとする内容項目の年間の指導時間数を増やし，一定の期間をおいて繰り返し取り上げたり，何回かに分けて指導するなど，年間指導計画の配列を工夫することによって重点的指導を行います。」（「解説道徳編」要約）

例えば，道徳教育重点目標の「生命の尊さを理解し，自他の生命を尊重する態度を養う。」を重点項目として，D (19)［生命の尊さ］に関わる内容項目を各学年とも 3 時間扱い，各学年の重点目標に関わる内容項目は，それぞれ 2 時間扱いとすることなどが考えられます。

その際，一つの内容項目に示されているいくつかの観点（例：生命の有限性，連続性，偶然性）ごとに考えたり，育てたい道徳性の諸様相（例：心情，態度）を発展的に考えたりするなど，ねらいの質の深まりを図った重点的指導が考えられます。

例　生命尊重ユニット［いのちを考える］

No.	教材名	ねらい（要約）
1	奇跡の一週間	「私」が考えた「いのち」について考え，かけがえのない生命をいとおしみ，限りある生命を輝かせて生きていこうとする心情を深める。
2	妹に	生命のつながりや関わり合いを考え，かけがえのない自他の生命を大切にしていこうとする心情を育てる。
3	三つのいのちについて考える	いのちの「有限性・連続性・偶然性」について考え，生命の尊さを深く理解し，かけがえのない生命を大切にしていこうとする態度を育てる。

複数時間の関連を図った指導

「一つの主題を 1 単位時間で取り扱うことが一般的ですが，内容によっては複数時間の関連を図った指導の工夫などを年間指導計画に位置づけて行うことも考えられます。」（「解説道徳編」要約）

例えば，一つの主題を，教材を活用した一般的な授業と役割演技などの体験的な活動を組み合わせて行う方法や，「いじめ」などの課題解決に向けて，課題に関わる複数の内容項目（C (11)[公正，公平，社会正義]，A (1)[自主，自律，自由と責任]）を関連づけて，課題について，多面的・多角的に考える方法などが考えられます。

例　いじめ問題対応ユニット［いじめのない世界へ］

No.	教材名	ねらい（要約）
1	私のせいじゃない	C (11) [公正，公平，社会正義] 泣いている子の立場に立っていじめの問題について考え，誰に対しても公正に接し，差別や偏見のない社会をつくろうとする心情を養う。（傍観者の立場から）
2	あの子のランドセル	A (1) [自主，自律，自由と責任] 自分の良心に従って行動することの大切さに気づき，自ら責任をもって行動しようとする態度を養う。（加害者の立場から）
3	どんなことでも相談し合える仲間に	［複数内容項目］ リフレーミングによって，自己肯定感を高め合ったうえで，いじめの問題を考えることを通して，自ら考え判断し望ましい行動を取ろうとする心情を養う。

Q4 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなことでしょうか？

A 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って，道徳科の授業の指導方法などの改善に努めることが大切です。

中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成 28 年 12 月以下「中教審答申 H28．12」）では，道徳科における「主体的・対話的で深い学び」について，次のように（網かけ部分）示されています。

「主体的な学び」の視点

…各教科で学んだこと，体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ，自ら道徳性を養う中で，自らを振り返って成長を実感したり，これからの課題や目標を見付けたりすること…

道徳科の授業は，内面的資質としての道徳的価値を生徒が主体的に養っていく時間です。生徒一人一人が見通しをもって主体的に考え，学ぶことができるよう，問題解決的な学習や体験を生かした学習を取り入れたり，道徳ノートやワークシートを活用したりして，自らを振り返って成長を実感したり，課題や目標を見つけたりすることができるよう工夫することも有効です。

「対話的な学び」の視点

…子供同士の協働，教員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えたり，自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ，自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすること…

道徳科の授業は語り合いの時間です。生徒どうしの語り合いが活発に行われるための教師の発問の工夫，教師や保護者・地域のかたなどのゲストティーチャーとの対話の工夫，グループでの語り合い（※合意形成ではない）や，探究の対話「p4c」を取り入れるなど，授業のねらいとする道徳的価値について，多面的・多角的に考えることができる対話的な活動を充実させることが大切です。

「深い学び」の視点

…様々な場面，状況において，道徳的価値を実現するための問題状況を把握し，適切な行為を主体的に選択し，実践できるような資質・能力を育てる学習とすること…

道徳科の授業を通して，生徒が主体的に獲得した，広がり深まった新しい道徳的価値の理解をもとに，人間としてのよりよい自分の生き方について考えを深めることが深い学びであり，授業の展開後段に，自己を振り返る場面を設けるなどの指導方法を工夫することが必要です。

Q5 道徳科の目標にある「道徳的諸価値の理解を基に」とはどのようなことですか？

A これまでの道徳的価値についての理解をもとに，授業を通して，自分の道徳的価値を問い直し，道徳的価値についての自覚を深めることです。

道徳科の目標

道徳科の目標は，『中学校学習指導要領』第 3 章第 1 に，次のように示されている。

> 第 1 章総則第 1 の 2 (2) に示す道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に (Q5)，自己を見つめ，物事を広い視野から多面的・多角的に考え (Q6)，人間としての生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。
>
> （下線，（Q5），（Q6）は筆者による。）

道徳的価値の自覚とは

道徳的価値とは，「よりよく生きるために必要とされるものであり，人間としての在り方や生き方の礎となるもの」（「解説道徳編」第 2 章第 2 節の 2）です。

具体的には，「強い意志」「生命の尊さ」「思いやり」などの単に内容項目を分類したものではなく，内容項目を含んだ，道徳授業のねらいとする見方・考え方や感じ方，行動の仕方のことです。

例えば，Q 7（本書 9 ページ）の「銀色のシャープペンシル」の授業では，「弱さ醜さを乗り越える強さをもつことによって，よりよく生きることの喜びを感じることができる。」ことが，道徳的価値であり，この道徳的価値を自分のこととして明確に意識することが道徳的価値の自覚と言えます。

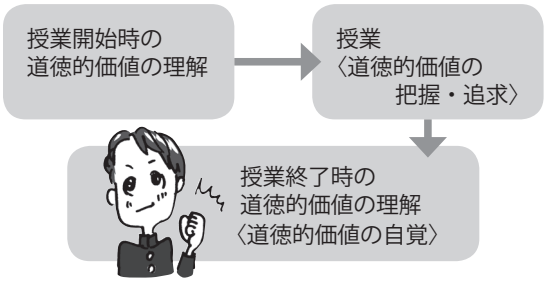
道徳的価値の自覚について，押さえておく三つの事柄については，Q 12（本書 16・17 ページ）に記載してあります。

道徳的価値の総体を示すときに「道徳的諸価値」という語を用います。

「道徳的諸価値についての理解を基に」とは

生徒がこれまでの生活体験や多くの人々との触れ合いの中で身につけてきた授業開始前の道徳的価値についての理解をもとに，道徳科の授業における道徳教材との出会いや，教師と生徒，生徒どうしの語り合いを通して，道徳的価値についての理解を問い直し，道徳的価値の自覚を深めることです。

価値の理解とは，客観的に，あるいは観念的に理解することではなく，自分のこととして，自分なりの考え方として理解することです。



Q6 道徳科の目標にある「物事を広い視野から多面的・多角的に考え」させるために，どのような工夫をすればよいのでしょうか？

A 語り合いを通して，さまざまな見方や考え方，感じ方に触れ，主体的に道徳的価値の理解を深められるよう，対話のある授業を工夫することが大切です。

多面的・多角的とは

「多面的」とは，学習の対象がさまざまな面をもっていること，「多角的」とは，学習対象をさまざまな角度から考察し理解することです。具体的な例はＱ 11（本書 14・15 ページ）に記載しています。

「多面的」と「多角的」とは必ずしも明確に分けられるものではないため，『学習指導要領』には「多面的・多角的」とひとくくりにして表現されています。

多面的・多角的に考えるための工夫

多面的・多角的に考えるためには，生徒どうしの対話（語り合い）を引き出し，対話をつなげる工夫が大切です。

◆ 生徒どうしの対話を引き出すための工夫

- 教師の発問に対して，生徒の発言が出にくい場合は，まず，自分の考えをワークシートにまとめてから，発言させるようにする。

◆ 生徒どうしの発言をつなげる工夫

教師が生徒の発言をつなげる努力をすることが大切です。教師と生徒との一問一答にならないように，生徒どうしが語り合えるようにすることが大切です。（キャッチボールではなく，バレーボール＝生徒どうしの語り合いから教師へ。）

- 「Ａさんが言ったことについて，Ｂさんはどう思いますか。」
- 「Ｃさんは，Ａさん，Ｂさんと同じ考えですか，違う考えですか。あなたの考えを話してください。」

◆ 生徒どうしの対話を深める活動の工夫

「教材や体験などから感じたことや，考えたことをまとめ，発表し合ったり，討論などにより，感じ方，考え方の異なる人の考えに接し，協働的に議論したりする。例えば，教材の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを自分との関わりで考えたり，友達の考えを聞いたり，自分の考えを伝えたり，話し合ったり，書いたりする。」（「解説道徳編」第４章第３節の４（1）より抜粋。）

道徳科の授業を指導する教師の姿勢

物の見方や考え方は人によって異なるものであり，特に，道徳科の授業を通して学ぶ道徳内容については，唯一の正解があるわけではないことを教師が十分に理解して，教師の考えを押しつけず，生徒の考えをよく聴き，よく見て，対話のある授業を工夫することが，道徳科の評価をするうえでも大切になります。

Q7 道徳科の授業は「ねらい」を明確にもって指導することが大切と言われますが，「ねらい」は，なぜ大切なのですか？

A 道徳科の授業は「ねらい」の達成を目指して展開されます。主題設定の理由に基づいてねらいを設定し，ねらいに迫る発問を吟味することが大切です。

ねらいの設定

道徳科の学習指導案に記述するねらいは，道徳内容に基づいて，授業で育てたい道徳性を明記したものです。

ねらいの設定の手順（例）は次の通りです。

1　指導する道徳内容について，「解説道徳編」に記載されている内容項目の概要，及び指導の要点について理解を深めます。

2　主題設定の理由（①～③）の記述を通して，指導する内容項目の，重点を置く部分を絞ることが必要です。

① 指導内容についての教師の捉え方

② 主題に関連する生徒の実態

③ 使用する教材の特質や取り上げた意図

3　道徳科の目標にある，道徳的判断力，道徳的心情，道徳的実践意欲と態度のどれを育てるのかを明確にして，簡潔に記述します。

道徳科の授業は，このねらいとする道徳的価値を把握し，追求し，高められた道徳的価値（見方・考え方や感じ方，行動の仕方）に照らして，生徒が主体的に，今の自分を振り返り，今後の自分の見方・考え方や感じ方，行動の仕方について自覚を深めることです。

道徳科の授業では，このねらいを明確にもって授業を進めることが大切であり，このねらいについての生徒の学習状況や道徳性の成長の様子が，道徳科の評価の視点になります。

ねらいに迫る発問

学習指導過程の発問を考える場合，まず，ねらいに迫る中心発問を考えます。主人公（筆者）が「悩む部分」「悩みを乗り越え，喜びを感じる部分」などを取り上げます。

例　実践事例「銀色のシャープペンシル」

◆ねらい

「人間には弱さ，醜さを乗り越える力があることを理解し，弱さを乗り越えて人間として生きる喜びを見いだそうとする態度を養う。」

◆中心発問

「すべての星が自分に向かって光を発しているように感じたのはなぜか。」

この中心発問に対する生徒の反応（発言など）が，「自分の弱さを乗り越えたすがすがしさを感じたから」など，ねらいとする道徳的価値に迫る反応となるよう，ねらいに迫る中心発問を吟味することが大切です。

Q8 道徳科における質の高い指導方法として，「自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「体験的な学習」が示されています。それぞれどのような学習方法ですか？

A それぞれの指導方法の特徴を十分に理解し，効果的に取り入れるようにすることが大切です。

平成 28 年 7 月に中教審専門家会議報告として，これからの道徳の授業における質の高い多様な指導方法の実現に向けて，上記の三つの指導方法が例示されています。これらの指導方法は，それぞれが独立しているものではないので，それぞれの指導方法の特徴を十分に理解し，道徳の授業づくりに効果的に取り入れることが大切です。

登場人物への自我関与が中心の学習

これは，教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して，道徳的諸価値を深める学習です。教材の登場人物の人間性に対して生徒の共感が高まれば，自分への振り返りが起こりやすくなります。自分への振り返りは道徳科の特質ですから，展開の後段で自己の振り返りをしっかり位置づけ，「自分ならどう考えるか，どう実践するか」と，道徳的価値を自分との関わりで考えたり，自分の考えを深めたりすることが効果的です。

例　教師の発問例

- ◆主人公が価値ある行動をとれなかったのは，どのような考えをもっていたからだろうか。
- ◆そんな主人公が価値ある行動をとれるようになったのは，どのような考えに気づいたからだろうか。
- ◆価値ある行動をとれるようになるためには，どのような考えが大切だろうか。

問題解決的な学習

道徳科における問題解決的な学習とは，生徒一人一人が生きるうえで出会う，さまざまな道徳上の問題や課題を多面的・多角的に考え，主体的に判断し行動し，よりよく生きていくための資質・能力を養う学習です。したがって，導入において日常生活や教材の中から道徳的な問題を見つけたり，自分たちのこれまでの道徳的価値の捉え方を想起させたりすることが大切です。また，展開では他者の考えと比べ自分の考えを深める工夫，展開後段や終末では，主題を自分との関わりで捉え，自己を深く見つめ直す工夫が必要です。

例　教師の発問例

- ◆このような問題が起きたのは，登場人物がどのような考えをもっていたからだろうか。
- ◆このような問題が起こらないようにするためには，どのように考えて行動することが大切だろうか。

道徳的行為に関する体験的な学習

これには，生徒の行為そのものを想起させ，今考えていることについて，実体験をもとに補充・深化・統合する方法，役割演技や動作化，擬似体験的な体験活動を通して道徳的価値をいっそう理解していく方法などがあります。教材の中の問題場面を役割演技で再現し，登場人物の葛藤を理解させたり，新たな場面を提示し，取りうる行為を再現し，道徳的価値や実現するために大切なことを体感することを通して，実生活における問題の解決に見通しをもたせたりします。

Q9 グループワークや役割演技など，多様な指導方法はどのように行えばよいですか？

A グループワークや役割演技を取り入れるねらいを明確にして，学習指導過程の一部に取り入れます。

最近の道徳授業では，問題解決的な学習においてグループでの話し合いなどを通して道徳的問題や道徳的価値について深めたり，道徳的な行為に関する体験的な学習として役割演技を取り入れたりする実践が見られます。それぞれの特徴を理解したうえで，効果的に取り入れることが大切です。

グループワークを効果的に取り入れる

中心発問等で道徳的価値を深めたい場合や大きい集団の中で自分の意見を表すことが苦手な生徒が多い場合に，数人のグループでの話し合いの過程を経て学級全体の話し合いに移行するようなときに活用されますが，50 分の授業すべてにグループワークを取り入れることは時間的にも無理があり，ポイントを絞った活用が必要です。

特に，グループでの話し合いは自分の考えを伝え，深めるためのものであり，グループで出た意見をつぶさないようにする配慮が必要であり，生徒の発言を可視化するという意味でホワイトボードの活用も効果的です。また，発問に対して生徒一人一人が自分の考えをもつ時間を確保し，次にグループでの話し合い，学級での話し合い，そして再度，個で考えるという学習指導過程を工夫することが大切です。

例 実践事例①

◆ 教材「全てがリオでかみ合った」
《東京書籍「新しい道徳」1 年［内容項目 A(4)］》

◆ 発問構成

- 自分の考え方を改めたいと，いろいろな人と相談している山縣選手をどう思うか。
- ◉腰痛や走り方，ネガティブな性格に悩んでいた山縣選手を支えていたのは，どのような思いだろうか。（個人→グループで考えた後で発表，学級で話し合い）
- 目標を達成するためには，どのような気持ちや考えをもつことが大切だろうか。

役割演技を効果的に取り入れる

「道徳的行為に関する体験的な学習」として，役割演技（ロールプレイ）が取り入れられます。しかし，道徳の授業として役割演技を取り入れるのは，表面的なスキルの習得を目指しているのではなく，道徳的に問題となっている状況を自分の問題として実演してみることで，道徳的価値の理解を深め，実生活における道徳的価値の実現に，自信をもって自分の選んだ行為を実践していくことのできる資質・能力を育成するためのものであることを踏まえた活用が大切です。また，多面的・多角的な見方・考え方に触れるために，役割を交換して演じてみることも効果的です。

例 実践事例②

◆ 教材「加山さんの願い」
《東京書籍「新しい道徳」3 年［内容項目 C(12)］》

◆ 発問構成

- なぜ，中井さんは「（加山さんの訪問が）楽しみになりましたよ。」と心を開いたのだろう。
- （加山さんは，田中さんに会う前に，雨の中で考えています。）加山さんは田中さんにどのような声をかけるだろうか。（田中さん（教師），加山さん（生徒）による役割演技）
- ◉人間どうしが支え合って生きていくために大切なことは，どんなことだろうか。

Q10 道徳の授業では，「導入の段階が大切」ということをよく聞きますが，導入の役割について説明してください。また，効果的な導入とはどのようなものですか？

A 導入の役割は，主題やねらいと関わる，これまでの自分の道徳的課題を自覚させることで，主題への導入と教材への導入があります。

これからは，道徳科の授業においても，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められることになります。ところで，道徳科における「主体的な学び」とは，「中教審答申 H28.12」によれば，「児童生徒が問題意識をもち，自己を見つめ，道徳的価値を自分自身との関わりで捉え，自己の生き方について考える学習」と説明されています。道徳科の学習指導過程における導入の役割は，主題やねらいと関わるこれまでの自分の道徳的課題を自覚するとともに，その自覚した道徳的課題をこの学習で解決する意欲をもたせることです。今後，生徒がより主体となる授業づくりにおいては，導入の充実がいっそう求められます。

道徳科における導入は，主として，「主題への導入」「教材への導入」が考えられます。

主題への導入

「主題への導入」とは，本時の主題と関わる問題意識をもたせる導入のことであり，主題やねらいに対する自分自身の今の見方や考え方を振り返らせる目的のもので，導入の方向性としては最も重視すべきです。

具体的には，ねらいや主題と関わる生徒の道徳的体験（日常の生活体験や体験活動等）を想起させる発問（発問①），次に，その時の自分の気持ち（見方・考え方，感じ方）を問う発問（発問②）をします。そこから，それらに潜む道徳的課題を明らかにし，自分の問題（学習課題）として意識させることが大切になります。

職場体験活動や合唱コンクールなど，生徒にとって共通の体験活動を取り上げたり，事前にねらいと関わるアンケートをとったりすることも効果的です。

教材への導入

「教材への導入」とは，授業で用いる教材に対する理解を助けたり，教材の内容に興味や関心をもたせたりする導入のことです。

生徒にとってあまり身近とは言えない内容項目や教材を扱う場合に，教材の時代的な背景や社会的な背景について興味や問題意識をもたせるような導入を工夫することで，展開段階における生徒の発言や思考を深めることができるようになります。

例

実践事例①

主題と関わる日常体験を想起させた導入

◆ 教材「みんなでとんだ！」《東京書籍「新しい道徳」2 年［内容項目 B(8)］》

◆ 学習指導過程（導入）

	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	指導上の留意点
導入	1　友達との関係について振り返る。 ● あなたにとって，友達とはどのような存在ですか。 ● どのような気持ちで，ふだん友達と接していますか。	● 友達に対して，何でも話をしたり，褒めたり注意をしたりできているかを考えさせる。
展開	【本時の学習課題】 真の信頼関係は大切だと思いつつ，つい表面的な付き合いをしてしまう自分を変えるには，どのような気持ちをもつことが大切だろうか。	

導入において，主題と関わる生徒の日常生活を想起させ，その時その時の自分の気持ち（見方・考え方，感じ方）を問う発問をした実践です。生徒の身近な生活から道徳的な問題を意識し，課題意識をもって教材に取り組むことができます。

例

実践事例②

学校行事との関連を図った導入

職業講話の生徒のアンケート（生徒の体験）から
● 働いている人の気持ちがよく分かった。　● 働くことの意義を考えるきっかけになった。

◆ 教材「『看護する』仕事」《東京書籍「新しい道徳」1 年［内容項目 C(13)］》

◆ 学習指導過程（導入）

	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	指導上の留意点
導入	1 「総合的な学習」で取り組んだ職業講話について，振り返る。 ● 「職業講話」を聞いて感じたことや気づいたことについて発表してください。	● 「職業講話」後のアンケートを用意する。

学校行事との関連を図った道徳科の授業は，道徳教育を補充・深化・統合した，まさに要としての機能を果たすことになります。生徒の共通体験にもとづいた導入を行うことで，生徒どうしの議論が活発になります。

例

実践事例③

教材の時代的な背景や社会的な背景について興味や問題意識をもたせる導入

◆ 教材「六千人の命のビザ」《東京書籍「新しい道徳」2 年［内容項目 C(18)］》

◆ 学習指導過程（導入）

	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	指導上の留意点
導入	1　主人公（杉原千畝さん）が外交官をしていた頃の世界状況について考える。 ● ユダヤ人がナチスドイツから逃れようとしていたのは，なぜですか。	● 当時の世界状況を把握させるために資料を用意する。
展開	【本時の学習課題】 どの国の人々も，同じ人間としてお互い助け合っていくためには，どのような見方や考え方が必要だろうか。	

道徳教材としては有名な「六千人の命のビザ」ですが，戦争体験のない生徒にいきなり教材について考えさせるのは難しく，教材に描かれている時代背景から道徳的な問題に気づかせる導入の工夫が必要です。

Q 11 展開の段階は，中心的な教材によって道徳的価値の自覚を深める段階と言われていますが，どのような発問構成を考えればよいのでしょうか？

A 最初に授業のねらいに深く関わる中心発問を考え，次に中心発問を考えるうえで必要と思われる場面を捉え，それを基本発問とします。

展開前段は，中心的な教材によって生徒一人一人がねらいの根底にある道徳的価値を追求する段階ですが，価値についての自覚を深めるためにも，追求，把握の過程で常に生徒の内面へ働きかける発問が必要です。

道徳の発問は,「一問多答」が原則です。よく「行間」を読むと言いますが，発問に関しては「行間を問う」ことを原則とします。「行間を問う」とは，書かれていないこと，つまり，尋ねられた生徒の内面を問うことになりますから，その反応も多様になります。

中心発問を軸とした発問構成

道徳の中心的な教材における発問は，次の 3 種類になります。

- 中心発問
  「ねらい」に迫るための決め手となる道徳的価値を追求する発問
- 基本発問
  中心場面の前後に価値の把握を効果的に行う発問
- 補助発問
  生徒の発言を角度を変えて考えさせたり，焦点化させたりする発問

発問を構成する場合は，最初に授業のねらいに深く関わる中心的な発問を考え，次に，中心発問を考えるうえで必要と思われる場面を捉え，それを「基本発問」として１～２問程度考え，全体を一体的に捉えるようにする必要があります。

一般的に，道徳の授業で使用する教材では，登場人物が「悩む部分 (同質性)」「悩みを乗り越える部分 (異質性)」「悩みを乗り越え，喜びが訪れる部分」が描かれています。

したがって，多くの場合の発問構成は，

第一発問　主人公が生徒と同質の道徳的課題をもつことを理解させるために，主人公が悩む理由を問う。（生徒との同質性）

第二発問　道徳的価値の実現に向かう大切な見方や考え方を追求するために，主人公が悩みを乗り越えるような変化をしたときの見方や考え方を問う。（道徳的価値の実現に向けた変化）

第三発問　道徳的価値を実現することのよさに気づかせるために，主人公が悩みを乗り越えた結果がもたらすよさについて問う。（道徳的価値の理解）

ということになります。

多面的・多角的な思考を促す発問

さらに，授業における発問を考えるうえで，道徳科の目標に示されているように「物事を広い視野から多面的・多角的に考える」発問が大切になります。

「多面的に考える」とは，「道徳的価値」がその特質として本質的に有している多様な側面から考えさせようとすることです。例えば，「友情」であれば，「仲よくする」「助け合う」「信頼し合う」「励まし合う」「高め合う」という多様な側面があ

ります。それぞれの側面から友情について考えを深めさせるということになります。

また，「多角的に考える」とは，考える立場や条件・観点を変えて考えさせようとすることです。例えば，いじめの問題について考えるのであれば，加害者の視点，被害者の視点，傍観者の視点から考えさせてみるということになります。

中学生の段階では，多面的・多角的な思考を促すために，右上の例にあるように，教材のもつ主題やテーマそのものに関わって，それを掘り下げたり，追求したりする発問も効果的です。

例

- 「本当の思いやりとはどのようなことだろう。」
- 「この教材が伝えたいことはどのようなことだろう。」

また，教師が効果的な補助発問をすることで，生徒の主発問への反応に対して，「本音」を引き出すために「揺さぶり」をかけたり，話し合いが一面的なときに多面的な思考を促したり，立場や状況を変えた多角的な思考を促したりします。

例 実践事例

中心発問を軸とした発問構成

◆ 教材「みんなでとんだ！」《東京書籍「新しい道徳」2 年［内容項目 B(8)］》

◆ 学習指導過程（展開前段）

	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	指導上の留意点
導入	【本時の学習課題】 真の信頼関係は大切だと思いつつ，つい表面的な付き合いをしてしまう自分を変えるには，どのような気持ちをもつことが大切だろうか。	
展開	2 「みんなでとんだ！」を読んで，次のことについて話し合う。 ● 自分がこの学級の一員だったら，今まで通りにしますか，矢部ちゃんを仲間に入れますか。 ・やはり，運動会だから勝つことを考えるべきである。 ・たくさん跳べなくても，矢部ちゃんを入れるべきだ。 ◉「最高のビリ！　最高の 2 年 1 組！」に込められた気持ちや思いはどのようなものだろう。 中心発問 ・「みんなで跳んだ」という達成感。 ・みんなが団結したことへの感動。 ● 自分のクラスを「最高！」と言うためには，どのような気持ちや考えが大切だろう。 ・お互いの気持ちを尊重して，認め合うこと。 ・お互いに悩み，考え，話し合うことが大切。	● 教師が教材を範読する。 ● 補助発問① 矢部ちゃんが応援係をやろうとしたのはなぜだろうか。 ● さまざまな意見による学級の生徒の葛藤を感じ取らせたい。 ● 補助発問② ビリだけれど最高。とは，どういうことだろうか。 ● みんなで話し合って得た友情の尊さに気づかせたい。

第二発問を中心発問とした発問構成の例です。第一発問は，自我関与を促す発問で，心情円やネームプレートを活用することも考えられます。第三発問は，主題そのものを追求するための発問です。

また，主発問に対して予想される生徒の反応を記述するのが道徳の学習指導案の特色ですが，これにより，事前に「補助発問」を考えることが可能になります。道徳的に揺さぶりをかけたり，立場を変えた視点から考えたりする「補助発問」を設定することで，多面的・多角的な思考を促すことができます。

12 Q 授業の終着点が行為行動の是非や善悪になってしまいがちです。展開の後段や終末の効果的な方法を教えてください。

A 教材から学んだ道徳的価値を，自分との関わりから捉え直す工夫が大切です。

道徳教育のねらいは道徳的価値の自覚であるとも言えます。ここで道徳的価値の自覚とは，「道徳的価値を自分のこととして明確に意識すること」であり，押さえておくべき三つの事柄があります。

① 道徳的価値についての理解
（人間理解や他者理解を深める）

② 自分との関わりで道徳的価値を捉える
（自己理解を深める）

③ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培う
（自己や社会の未来に夢や希望をもつ）

道徳科の目標（『中学校学習指導要領』第 3 章第 1）には，

> …道徳的諸価値についての理解を基に，…(中略)…，人間としての生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。

とあります。「道徳的諸価値の理解」とは①に当たります。行為行動の是非や善悪が授業の着地点にならないようにするためには，学習指導過程の展開後段や終末で，②，③を実現するための工夫を意識することが大切です。これが人間としての生き方についての学びと結びつき，内面的な資質である道徳的判断力，心情，実践意欲と態度を育成し，主体的な道徳的実践につながります。

展開後段の工夫

展開後段は，「自己を見つめる段階」とも言われます。ここで，教材から学んだ，より高められた道徳的価値と照らして，現在までの自分の体験等について振り返らせ，今後の自分の考え方や感じ方，行動の仕方についての自覚を深めさせます。

中学校では，授業の感想やまとめとしてワークシートに記述することが多いのですが，生徒が何をもとに振り返るのか，教材から学んだ道徳的価値を明確にするとともに，「教材から学んだ，より高められた道徳的価値と照らして，今の自分はどうだろうか。」という発問をすることでいっそうの充実が図れます。

また，事前に，ねらいと関わる，生徒一人一人の実態（体験）を十分に分析しておけば，授業者が意図的に指名をすることも可能になり，積極的な発言を引き出すうえで効果的です。

さらに，生徒は他の生徒の考えを聴くことで，物事を広い視野から多面的・多角的に考え，いっそう深く自分を見つめることができるようになるので，生徒の多様な感じ方や考え方を引き出すことができるような学級の雰囲気づくりが重要になります。必要に応じて，ペアでの対話やグループによる話し合いを取り入れるなどの工夫も必要です。

終末の工夫

終末は，本時のねらいとする道徳的価値を確認させ，実践への意欲を高める段階でもあります。生徒一人一人が「道徳的価値を実現しようという

思い」を抱けるように，道徳的価値を強調することが大切になります。

具体的には，教師の見聞として，身近な望ましい行為の実践例を紹介するだけではなく，生徒作文を紹介したり，保護者の声を録音しておいて紹介したりする方法もあります。また，主たる教材以外に，数分程度で終わる歌や名言，格言，人物伝などを用意することも効果的です。また，高められた内面的な道徳性を主体的な道徳的行為に結びつけるためにも，教師の生徒への叱責，訓戒や行為，考え方の押しつけにならないように注意し，余韻のある終わり方になるように配慮することが大切です。

例 実践事例①

展開後段を明確に位置づけた指導

◆教材「みんなでとんだ！」《東京書籍「新しい道徳」2年［内容項目 B(8)］》

◆学習指導過程（展開後段・終末）

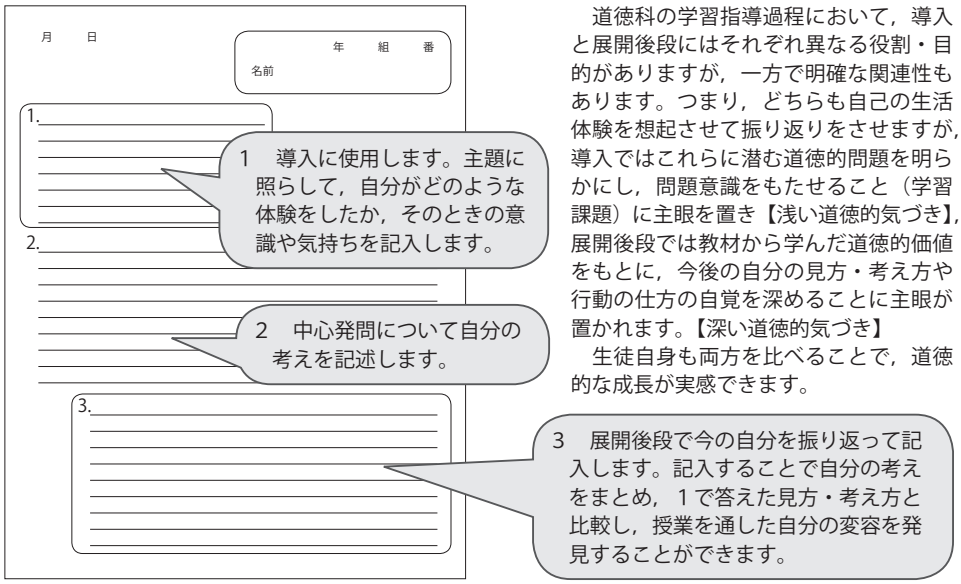
	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	指導上の留意点
展開	【教材から学んだこと】 本音で話し合い，お互いを認め合い，高め合おうとする気持ちをもつことが大切だ。そうすると，いっそう深い友情を築くことができる。 3　今の自分を振り返り，次のことについて話し合う。 ●教材から学んだ友情の在り方と照らして，今の自分の見方や考え方はどうだろうか。	●把握した価値をしっかり確認し，時間を十分にとり，じっくりと振り返らせる。
終末	4　教師の説話を聞く。	●余韻を残すような説話を聞かせ，本当の友情を築いていこうとする態度を養っていきたい。

展開後段で教材から学んだ道徳的価値を明確にし，それをもとに今の自分の「友情」についての見方や考え方を振り返らせます。ワークシートへの記述だけではなく，生徒どうしの語り合いを目指します。

また，終末では，余韻を残した終わり方をするために，友情と関わる歌や格言の紹介も効果的です。

例 実践事例②

自己の振り返りを充実させるためのワークシートの工夫



道徳科の学習指導過程において，導入と展開後段にはそれぞれ異なる役割・目的がありますが，一方で明確な関連性もあります。つまり，どちらも自己の生活体験を想起させて振り返りをさせますが，導入ではこれらに潜む道徳的問題を明らかにし，問題意識をもたせること（学習課題）に主眼を置き【浅い道徳的気づき】，展開後段では教材から学んだ道徳的価値をもとに，今後の自分の見方・考え方や行動の仕方の自覚を深めることに主眼が置かれます。【深い道徳的気づき】

生徒自身も両方を比べることで，道徳的な成長が実感できます。

Q13 「考え，議論する道徳」を実現するために，多くの生徒の発言を引き出したいのですが，発言する生徒が限られてしまいます。どのような工夫をすればよいのでしょうか？

A 生徒の発言をつなげる言葉かけや，自分の考えを可視化する工夫が効果的です。

道徳科における「言葉の役割」として，「解説道徳編」第４章第３節の４には，次のような記載があります。

> …道徳科は，…（中略）… 教材や体験などから感じたことや，考えたことをまとめ，発表し合ったり，討論などにより感じ方，考え方の異なる人の考えに接し，協働的に議論したりする。

つまり，道徳科の目標を実現するためには，生徒どうしが自分の考えを語り合うことが大切であり，そのためにも多くの生徒の発言を引き出す工夫が求められます。

生徒の発言をつなげる言葉かけ

一部の生徒の発言のみになったり，生徒との一問一答を避けたりするためには，教師として生徒の発言をつなげる言葉かけが必要です。具体的には，

- 「Ａさんが言ったことを，あなたはどう思いますか？」
→「僕は，Ａ君と違って～。」
- 「ＣさんはＡさん，Ｂさんと同じ考えですか，違う考えですか？」
→「私は，Ａさんの考えと似ているのですが，～。」

というように，生徒の発言をつなげていくことで，生徒相互の話し合いに導きます。その際，生徒に他の生徒の発言をしっかり聴くように指導することが大切ですが，生徒に他の生徒の発言を聴かせるためにも，教師は生徒の発言を繰り返さないようにします。ここで，教師が繰り返すと，生徒は他の生徒の発言を聴かなくなってしまいます。

自分の考えを可視化する工夫

「心情円」や「ネームプレート」を使って，発問に対する自分の考えを可視化することも，生徒の授業への参加意識を高めることにつながり，多くの発言を引き出すための効果的な方法になります。

その際に，自分の考えを可視化するだけではなく，意思表示することを通してその根拠を説明させるようにしたり，基本発問に対して自分の考えを意思表示させ，さらに中心発問の後で自分の考えの変化を意思表示させたりすることが大切になります。

例　実践事例

◆ 教材「左手でつかんだ音楽」
《東京書籍「新しい道徳」２年［内容項目 A(4)］》
◆ 発問構成
- 何もする気のなくなった舘野さんの気持ちを，心情円を使って表現してみよう。（絶望的な気持ちと，希望を捨てたくない気持ちを心情円を使って示す。）
- ヤンネさんから送られた「左手のための三つの協奏曲」を弾いた舘野さんは，どのような気持ちになっただろう。（再度，心情円で示す。）
◉ あきらめない気持ちの根幹にあるものについて考える。

Q 14 「特別の教科　道徳」が始まり，一人一人の生徒に対する評価が必要になっています。道徳科の評価に対する基本的な考え方は何ですか？

A 生徒に対する評価の観点と視点，生徒の道徳性の成長に係る評価，指導と評価の一体化の３点が大切です。

『中学校学習指導要領』第１章総則第３の２（1）には，

> 生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また，各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して，学習の過程や成果を評価し，指導の改善や学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすようにすること。

と示されています。

道徳科における評価についても以上のことが基盤となります。

道徳科の評価については，『中学校学習指導要領』第３章第３の４に，次のように記載されています。

> 生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し，指導に生かすよう努める必要がある。ただし，数値などによる評価は行わないものとする。

評価の基本的な考え方

1　評価が結果として生徒の成長を促すものになること。

2　個々の生徒の道徳の時間における，その道徳性の成長度合いを積極的に受け止め，励ます個人内評価を行うこと。

3　数値などによって不用意に評価してはならないこと。

生徒に対する評価の観点と視点

他生徒との比較ではなく，その生徒が年間や学期にわたり，いかに成長したかを記述により評価します。

- 道徳科の目標は生徒の道徳性（道徳的判断力，心情，実践意欲と態度）の育成にあります。道徳性は生徒の人格全体に関わるものであることを踏まえた評価です。道徳性の諸様相である，道徳的判断力，心情，実践意欲と態度について，それぞれに分析し，観点別に評価することは道徳科の評価としては適切ではありません。

※評価には，evaluation（値踏み）assessment（診断）appreciation（真価を認め励ます）等がある中で，道徳科では appreciation（真価を認め励ます）と捉えて評価します。

生徒の道徳性の成長に係る評価

生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握すること。

- 一人一人の生徒が，授業を通して道徳的価値について，教材や授業の中で他者のさまざまな意見を聞いて考えが深まったり，違う価値観につ

いての思考が広がったりしているかを把握します。

- 画一的な道徳的価値についての再確認をするのではなく，自我関与，つまり「自分はどうなのだろう」といった視点をもって，授業に臨んでいるかを把握します。

※道徳性に係る成長の様子とは，一般的な道徳性の成長を指すものではなく，道徳の授業における，生徒の学習の様子が，どのように成長（変化）しているかを把握しているかということです。

指導と評価の一体化

他教科と同様に，常に教師の指導に生かされ，指導と評価の一体化が図られる必要があります。

- 一人一人の生徒の状況を把握して授業が進められていたか。また，一人一人の生徒が授業の中で活躍し，道徳を学ぶ意義を感じて授業に参加できていたか。つまり，いかに授業が充実していたかが大切です。評価はこのことなしに語ることはできません。

評価文の記述について

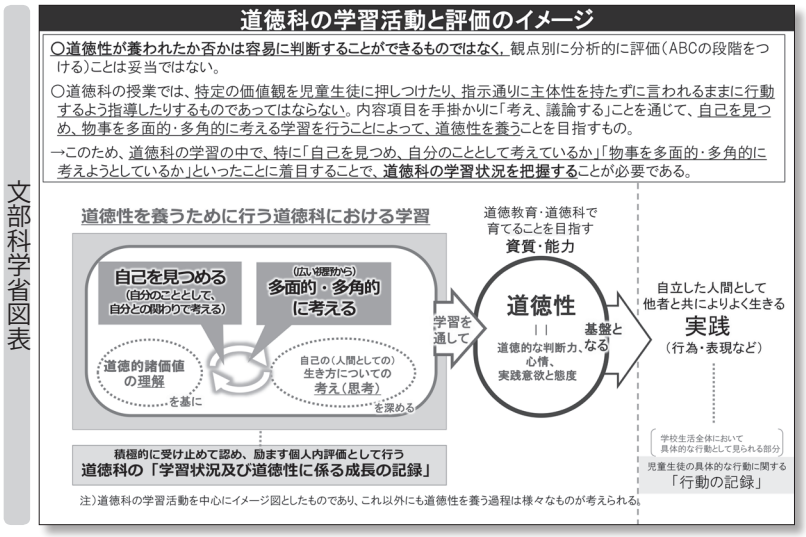
道徳科の目標は人間の内面的資質である「道徳性」を育成することにあります。「人間性」とは，人間としてよりよく生きようとする人格的特性といえます。よって，道徳性は極めて多様な生徒の人格全体に関わるものであるため，「解説道徳編」では，評価に当たっては，個人内の成長の過程を重視すべきであると説明されています。

また，「解説道徳編」第 4 章第 3 節の 3 には，次のように書かれています。

> 道徳科の授業では，教師が特定の価値観を生徒に押し付けたり，指示どおりに主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは，道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。…（中略）…
>
> …道徳科の学習では，教師が生徒に対して特定の価値観を教え込むのではなく，教師が生徒と共に人間の弱さを見つめ合い，考え合った上で，夢や希望などを共に語り合うような姿勢をもつことが大切になる。

以上のことは，評価を記述する場合に，十分配慮したい点です。

評価の観点については，文部科学省が次のような資料を提示しています。



出典：「道徳教育の抜本的充実に向けて」（文部科学省）
（https://doutoku.mext.go.jp/pdf/h29_block_training_materials.pdf）
（2019 年 8 月 21 日に利用）

このように道徳科における評価は，学習過程を評価することになります。

評価の視点については「解説道徳編」の 113 ページに視点例と方法例が示されています。あえて観点とは言わず視点としていることも意識する必要があります。

次に，評価文を例示します。

1. 道徳の授業を通して，特に「思いやり」について自ら考えようとする姿勢が見られました。友達の発言から，今まで自分が考えていた「思いやり」が必ずしも誰かと同じであったり，伝わったりするとは限らないということを学んでいました。
2. 道徳の授業では積極的に意見を述べるだけでなく，友達の意見に耳を傾け，肯定的に聞こうとする姿が見られました。具体的な教材名 の学習では , 自分に対しても人に対しても公平であるべきだと考えていることが , 発言や感想から伝わってきました。

1 は，道徳科の授業における学習状況を中心とした評価です。

2 は，継続的な学習状況とともに，授業で扱った教材の中での学習状況を具体的に評価しています。

指導要録に記載する場合は，道徳科における学習状況全体に関わる様子を記載し，通知票の場合は，具体的な教材名や発言内容を挙げると，生徒や保護者に伝わりやすくなります。そのため，家庭でも，道徳の授業でどのようなことが行われているのかが話題になる可能性があります。

次に，悪い評価例を示します。

例　事例 1（行動所見との混同）

1. この 1 年間でさまざまな道徳の授業に取り組んできました。その結果，自分から係の仕事に取り組んだり，失敗してもその事実を認め，次に生かそうとする姿が見られたりしたことは大きな成長です。さまざまなことを吸収する気持ちを大切にしていきましょう。
2. 「思いやり」について学んだことで，日常生活の中で，友人に「手伝おうか」などと，自然に声かけができるなど，他者の状況を共感的に捉えている場面が多く見られます。素直に行動に移せる点が素晴らしいと思います。

以上はありがちな評価文ですが，書かれている内容は行動所見です。道徳科の評価との差別化を図りましょう。

例　事例 2（特定の価値の押しつけ）

3. 授業では自分なりの考えを発言することができました。また，自分だけの意見に偏ることなく友達の意見もよく聞いていました。礼儀を扱った教材では，誰に対しても自分からきちんと挨拶することがだいじだということを理解していました。ノートには，日常生活でもそのことを実行に移したいと書いていました。

一見よく書けている所見のようにみえますが，「挨拶はだいじで, 自分から進んですべきである。」という一方的な価値観を押しつけるような所見になっています。道徳科は，その行為がなぜ大切なのか？どうしてそうするのかを考える時間であり，生徒一人一人の思いや価値観を育む時間です。行為や価値を押しつけたり行為を指示・強制したりする時間ではないことを踏まえた所見にしましょう。

例　事例 3（抽象的難解用語の使用）

4. 人間としてよりよく生きるために道徳的価値観・判断力，または生き方について，他者と考えを比較したり，葛藤を進化させたりして，自らの道徳性を高めることができていました。

抽象度が高いうえに，道徳的価値観・判断力，または生き方について，教師自身がよく理解していないだろうと想像させます。学習指導要領の用

語を乱用していて生徒・保護者には，何をどう評価されているのかが伝わりません。道徳性を評価の対象にしているところにも問題があります。

例　事例４（短所の指摘）

> 5. 自分の意見をしっかりもって発表することができていました。また，周りの意見を聞くことで，自分の考えをより深めることができていました。最初は自己中心的な考え方でしたが，他者視点をもって考えるようになりました。

所見ではつい，生徒の課題点を指摘しがちです。これを読んだ生徒や保護者はどう思うでしょうか。教師はそのつもりではなくても，「自己中心的な考え方をする」という部分だけが浮き彫りになります。生徒の成長を肯定的に受け止め，「道徳また頑張ろう。」と思えるような表現を心がけましょう。

悪い評価文は，例えば次のように直すことでよくなります。

例　悪い評価文（修正前）

> 道徳の学習内容について，自分なりの考えをもって取り組みました。他のクラスメイトとテーマについて話し合うことで，考え方をさらに広げ，学校生活に生かしてほしいと思います。

評価は授業の中の生徒の姿にとどめましょう。道徳での学びは個々の道徳的価値の理解に関する成長を促すものです。結果としてよりよい生活等に結びつくこともありますが，道徳科の授業は必ずしもそれを求めるものではありません。

下線部を次のように変えてみます。

例　悪い評価文（修正後）

> 道徳の学習内容について，自分なりの考えをもって取り組みました。他のクラスメイトとテーマについて話し合うことで，考え方がさらに広がり，授業の中で考えたことや考えさせられたことを自分の学校生活の中で生かしていきたいという態度を育んでいました。

評価を気にするあまり，「評価をどうするか」「評価をどう書くか」ということばかりに意識がいきがちです。しかし，大切なことは「指導のねらいが明確な指導のもと，教師と生徒が，いかに生きるべきかを，ともに考える道徳科の授業，よりよい授業づくりが，根底にある。」ということです。多くの先生がたが，評価をするとき，「自分は何を指導しようとして，この１時間の授業を行っていたのかに立ち戻ります。」と言うのを聞きます。評価はこの言葉につきるのだと思います。

Q15 道徳科の評価は，大くくりな評価とあります。１時間１時間の授業の評価は考えなくてよいのでしょうか？

A 大くくりな評価とは，年間や学期ごとのまとまりの中で，道徳科の評価をすることですが，１時間１時間の生徒の学習状況を把握しておくことが大切です。

大くくりな評価

道徳科の評価については，「解説道徳編」（第５章第２節の２）に次のように記述されています。

> …（道徳科の）目標に掲げる学習活動における生徒の具体的な取組状況を，一定のまとまりの中で，生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ，学習活動全体を通して見取ることが求められる。
>
> その際，個々の内容項目ごとではなく，大くくりなまとまりを踏まえた評価とすることや，他の生徒との比較による評価ではなく，生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め，励ます個人内評価として記述式で行うことが求められる。
>
> （下線は筆者による。）

上の記述にある大くくりな評価とは，「思いやり，感謝」「希望と勇気，克己と強い意志」「相互理解，寛容」といった内容項目ごとに評価するのではなく，年間や学期ごとなど，一定の時間的なまとまりの中で，生徒の学習状況や道徳性に係わる成長の様子を評価することです。しかし，すべての評価が一定の時間的なまとまりの評価ということではありません。ある授業だけに見えた顕著な生徒の学習状況を，評価として記述することもあります。そのためには，１時間１時間の生徒の学習状況を把握しておくことは大切なことです。

個人内評価

- 道徳科の評価は，他者との比較ではなく生徒一人一人のよい点や成長の度合い，可能性等の多様な側面を把握し，年間や学期を通してどれだけ成長したかという視点から個人内評価として記述します。

生徒の授業における学習の様子をしっかりと見取っていくためには，生徒が１時間１時間の授業の中で互いを認め，互いに語り合う中で，深い学びへと進むようにしていく必要があります。

評価の視点

◆一面的な見方から多面的・多角的な見方に発展させているかどうか。
- 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を，さまざまな視点から捉え，考えようとしている。
- 自分と違う立場や感じ方，考え方を理解しようとしている。

◆道徳的な価値の理解を，自分自身との関わりの中で深めているか。
- 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え，自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。
- 現在の自分自身を振り返り，自らの行動や考えを見直している。

以上の評価の視点を中心に，顕著に認められる具体的な状況を記述します。

ただし，道徳科の授業の中で，教師が生徒とともに考えたことと評価は切り離して考えることはできません。授業における生徒の考えや意見をしっかり受け止め，励ますことが道徳科の評価ということです。

評価の材料

評価の材料としては，次のことが挙げられます。

① 生徒の学習過程や成果などの継続的な記録（ワークシートや道徳ノートの活用）

② 生徒が自らの道徳性を養っていくうえでのエピソードや作文，スピーチなどの記録

③ 生徒自身の自己評価や相互評価

④ TT 授業やローテーション授業等，複数の教師が連携した授業の記録

①～③では具体的な授業の学習指導過程を通じて，生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を長期的に把握することができます。

④では，道徳科の授業は担任が行うことが基本ですが，担任が自分の学級の道徳の授業を参観したり，学年や学校全体で授業を行ったりすることで，学校全体の道徳科の授業が活性化するとともに，複数の教師が生徒の道徳性に係る成長を多面的に見取ることができるなどのよさがあります。

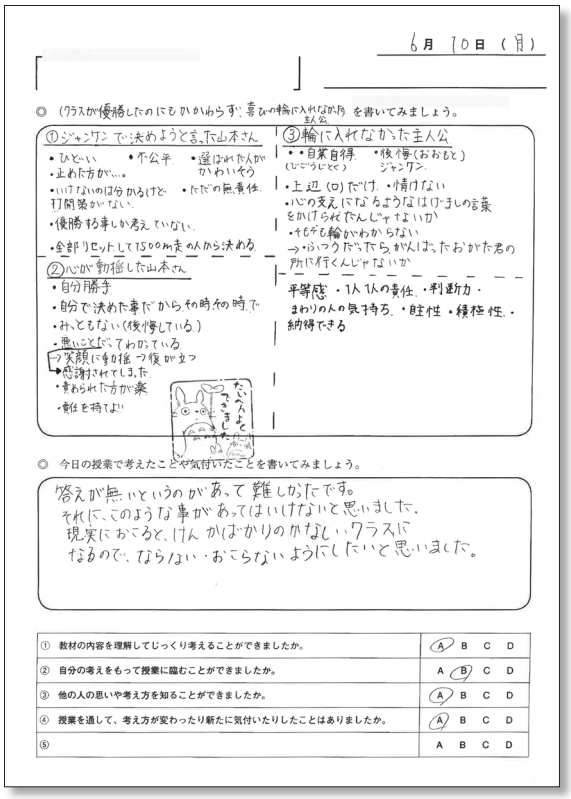
また，授業参観や地域公開日などに道徳科の授業を公開し，保護者や地域のかたがたに授業に参加していただいて，感想を評価に生かすことも考えられます。より多くの人が生徒の道徳性に係る成長を好意的に受け止めていくことが大切です。

評価についての留意事項

評価をする場合は，記録物や役割演技などの実演自体を評価するのではなく，生徒が学習指導過程の中で，道徳的価値について理解を深めようとしていたかについて評価することに留意する必要があります。

発言が多くない生徒や，文章記述が苦手な生徒，発達障がい等のある生徒，日本語の習得の不十分な生徒がいることを踏まえ，発言や記述ではない形での表出を見取ることに着目することも大切です。また，道徳ノートに自己評価欄等を設けておくのもよい方法です。グループやペアワークなどを取り入れたり，役割演技などを授業に取り入れたりするといった工夫も大切です。

例　道徳ノートの一例


6月 10日（月）

◎（クラスが優勝したのにもかかわらず，喜びの輪に入れなかった主人公）を書いてみましょう。

①ジャンケンで決めようとした山本さん
- ひどい　・不公平　・選ばれた人がかわいそう
- 止めた方が…。
- いけないのは分かるけど打開策がない。　・ただの無責任
- 優勝する事しか考えていない。
- 全部リセットして1500m走の人から決める。

②心が動揺した山本さん
- 自分勝手
- 自分で決めた事だからその時その時で
- わ、ともだち（後悔している）
- 悪いことをしてわかっている
- → 笑顔に動揺 → 後悔が立つ
- → 感謝されてしまった。
- 喜ばれた方が楽
- 転を待てよい

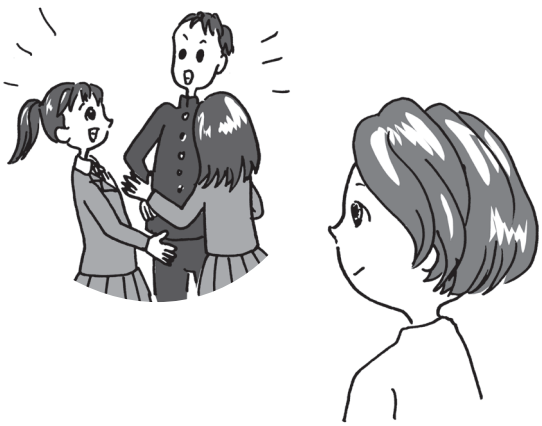
③輪に入れなかった主人公
- ・自業自得（じごうじとく）　・後悔（おおもと）ジャンケン。
- 上辺（口）だけ，・情けない
- 心の支えになるようなはげましの言葉をかけられたんじゃないか
- そもそも輪がわからない
- → ふつうだったらかんはったおかた君の所に行くんじゃないか

平等感・1人1人の責任・判断力・まわりの人の気持ち・主体性・積極性・納得できる

◎ 今日の授業で考えたことや気付いたことを書いてみましょう。

答えが無いというのがあって難しかったです。
それに、このような事があってはいけないと思いました。
現実におこると、けんかばかりのかなしいクラスになるので、ならない・おこらないようにしたいと思いました。

①	教材の内容を理解してじっくり考えることができましたか。	(A) B C D
②	自分の考えをもって授業に臨むことができましたか。	A (B) C D
③	他の人の思いや考え方を知ることができましたか。	(A) B C D
④	授業を通して、考え方が変わったり新たに気付いたりしたことはありましたか。	(A) B C D
⑤		A B C D



著者紹介

飛田（ひだ）　仁（ひとし）
フェリス女学院大学・星槎大学　講師

1950 年生まれ。神奈川県横浜市出身。
横浜市教育委員会指導主事，横浜市立中学校校長を経て現職。元関東甲信越中学校道徳教育研究会会長。
「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育」（文部科学省『中等教育資料』平成 22 年 3 月号），「教師の職務とその課題」（日本大学教育学会『教育学雑誌』平成 26 年 12 月）などを執筆。

齋藤（さいとう）　孝（たかし）
洗足学園音楽大学・女子美術大学　講師

1956 年生まれ。神奈川県横浜市出身。
横浜市教育委員会指導主事，横浜市立中学校校長を経て現職。前横浜市道徳教育部会会長・前神奈川県道徳教育部会常任理事。
横浜市版中学校道徳副読本「豊かな心を育てる」などを執筆。

馬場（ばば）　尚子（なおこ）
神奈川県相模原市立上鶴間中学校　校長

1958 年生まれ。新潟県長岡市出身。
関東甲信越中学校道徳教育研究会理事，神奈川県公立中学校教育研究会道徳教育部会副会長・資料委員会委員長，日本道徳教育学会神奈川支部理事。

道徳 Q&A ― 実践編 ―

◆◆ 執筆者 ◆◆
飛田　仁（フェリス女学院大学・星槎大学　講師）
齋藤　孝（洗足学園音楽大学・女子美術大学　講師）
馬場　尚子（神奈川県相模原市立上鶴間中学校　校長）

東京書籍
本社　〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1　Tel:03-5390-7402（中学道徳編集部）Fax:03-5390-6014
支社・出張所　札幌 011-562-5721　仙台 022-297-2666　東京 03-5390-7467　金沢 076-222-7581　名古屋 052-939-2722
大阪 06-6397-1350　広島 082-568-2577　福岡 092-771-1536　鹿児島 099-213-1770　那覇 098-834-8084
ホームページ　https://www.tokyo-shoseki.co.jp　教育資料データベース 東書Eネット　https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/

令和元年 10 月発行　Copyright © 2019 by Tokyo Shoseki Co., Ltd., Tokyo　All rights reserved.　Printed in Japan
この資料は，一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

92372